

保育者養成校と保育現場の連携の試み

一人と関わる力の育ちに着目して—

長谷川 香・平原 由衣

Attempting in Cooperate with a Childcare worker Training
School and the Nursery Schools : Focusing on the Development
of the skills to Interact with Others

Koh Hasegawa, Yui Hirahara

豊岡短期大学 論集

第 16 号 別冊

令和 2 年 3 月 31 日 発行

保育者養成校と保育現場の連携の試み

一人と関わる力の育ちに着目して—

Attempting to Cooperate with a Childcare worker Training School and the Nursery Schools : Focusing on the Development of the skills to Interact with Others

長谷川 香・平原 由衣

Koh Hasegawa, Yui Hirahara

はじめに

近年、子どもたちを取り巻く社会環境の変化により、小さな子どもが身近にいない等、保育士を目指して学ぶ学生たちでも、保育士養成で必修とされている現場実習の際、どのように子どもと接すればよいのか戸惑う学生も見られる。幼稚園教育要領には、保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領と共通の内容で、領域「人間関係」の目標として、「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」とある¹⁾。しかし、子どもの頃から人と関わる機会が減少しており、自分自身、人と関わる力に課題のある学生もあり、現場実習では、子どもはもちろん、保育士との関わり方に悩む場合もある。そのような現状を踏まえ、本校では、1年次から体験学習をカリキュラムに取り入れ、実習以外でも、乳児から就学前の子どもと触れ合える機会の充実を図るなど、特色ある保育士養成の取り組みを行っている。その中で、保育園児が参加する授業では、日ごろ関わることの少ない子どもたちと、実際に触れ合う貴重な機会となるだけではなく、その後の学習において、子どもの姿が具体的にイメージできるようになり、学ぶ意欲の向上につながることを期待される。

今回は、その取り組みの一つとして、保育園行事「お店屋さんごっこ」参加の実践を取り上げ、学生の子どもの発達理解や、子どもとの関り方を学ぶことを目指した実践授業について報告するとともに、今後の課題を考察したい。

1. 保育現場における「お店屋さんごっこ」の展開

「ごっこ遊び」とは子どもの発達段階で見られる遊びのひとつであり、成長過程や状況に合わせ、遊び方が変わってくる。最初は1人で身近な大人のふりをしたりすることからはじまり、やがて自分の想像したことを複数人で共有しながら遊びを拡げ楽しむ姿が見られるようになる。保育の現場においては年齢や発達段階で様々なごっこ遊びの様子が見られるが、その中でも想像力やコミュニケーション能力の育ちに大きくつながる遊びのひとつとして「お店屋さんごっこ」がある。

「お店屋さんごっこ」とは、テーマに合わせて子ども同士それぞれ役割になりきりながら遊ぶあそびであり、相手の発言に対して自分で考え言葉を選びながら関わらなければならない。自分以外の視点について考えるため、視野が広がることも期待でき、それが他人の気持ちを考える機会にもなる。また、相手とのやり取りを通して身近な日常生活における役割を認識することもでき、遊びの中から社会のマナーも身に付いていく。子どもたちは「お店屋さんごっこ」という遊びから自然に多くのことを学び、成長することができるため、保育現場では各年齢の子どもたちが楽しめるような行事として多くの園が取り入れている。

例えば、年中以上の子どもたちは身近な材料で製作をおこない「売る側」としての役割を担い、年少児や乳児は「買う側」として参加する。その際、「売る側」の子どもたちは製作や接客などの場面で友だち同士イメージを膨らませ工夫し、それを共有して遊びを展開させていくため協調性が育つ。また、「買う側」の子どもたちもやり取りを楽しみながら、自分の思いを伝えることや順番を待つことなどの簡単なルールを学ぶことができる。このように、「お店屋さんごっこ」には保育の「五領域」それぞれを取り入れた遊びの要素がある。ここでわかるように「五領域」を取り入れた遊びと、子どもたちが楽しくできる遊びとはイコールで結ばれる関係にあると考えられる。

以上のように、「お店屋さんごっこ」という遊びは、「保育園」という子どもたちが共に成長していく生活の場でこそ多方面から楽しめる遊びであり、子どもたち自身が主となり考え動いていくことがとても重要なねらいとなる。それらをふまえて考慮しなければならないのは、「お店屋さんごっこ」における保育者の援助の仕方である。危険な行為やトラブルについては細心の注意が必要だが、大人はあくまでも子どもたちの様子を「見守ること」に徹する必要がある。その理由としては、ふとした子どもの発見やイメージの表現を保育者の言動で妨げてしまうと、成長において大きな影響を与える可能性もあるからである。その他にも、子どもたちの年齢別の目的・目標や同じ年齢でも一人ひとりできることに違いがあることを十分に理解し、援助していくことが必要となる。したがって、保育者はどの子どもも楽しんで取り組み参加できるような配慮をし、どうすれば子どもたちが楽しみながら自分自身の力で成長していけるのかを常に考え、遊びを提案していかなければならない。

2. 連携授業としての保育園行事参加

本校が授業連携を行っている保育園の一つ、K保育園でも、園行事の一つとして、「お店屋さんごっこ」が取り入れられている。その中で、子どもたちは、お客になって買い物をしたり、自分たちでお店屋さんになるなど、他者とのやり取りを楽しみながら活動が展開される。行事当日、K保育園では、子どもたちは、順番にお店で買い物を楽しんだり、店番を担当していくが、その間子どもたちが役割を交代する際、時間調整するためのゲームコーナーが設けられている。従来は、保育士がそのコーナーを担当し行事が運営されていたが、今回は、学生が行事に参加するにあたり、あらかじめ園側と打ち合わせを行い、学生たちがゲームコーナーの企画立案・準備をし、ゲームコーナーを担当することにした。そうすることで、各クラスの担任保育士は、子どもたちが十分活動を楽しめるよう配慮することに集中できること、また、学生は、実際のゲームコーナーを自分たちだけで担当し、遊びの進行をすることで、子どもの発達理解はもちろん、主体的に活動を運営するという学びの機会にもなると期待されたためである。

1) 授業計画および展開

(1) 授業の目的

2年次後期の選択授業である「発達心理学Ⅱ」は、1年次の必修授業「発達心理学Ⅰ」や「教育心理学」、現場での保育実習等を通して、これまで学んできた子どもの発達の中でも、特に、遊びの発達や人との関わりの発達に焦点を当て、実際に子どもたちと触れ合いながら、改めて、自分自身の理解度を振り返り、学びを深めることを目的とした。

(2) 方法

- ・期間：2017年10月～2018年1月
- ・対象：A市保育士養成校2年生9名 「発達心理学Ⅱ」履修者
- ・協力：A市K保育園
- ・講義計画：
 - ① オリエンテーション
 - ② グループワーク
 - ③ 保育園での半日保育（保育園）
 - ④ 保育園での行事担当保育士との打合せ（保育園）
 - ⑤ グループワーク
 - ⑥ 保育園行事準備・参加（保育園）
 - ⑦ 振り返り学習
 - ⑧ まとめと発表

(3) 実施内容

学生が主体となってゲームコーナーを企画運営するにあたり、授業において、さまざまなゲームの実践方法や展開、環境づくり、年齢による支援等について、グループワークを通して検討した。

その後、保育園において行事担当保育士と打ち合わせを行い、学生の立案について感想と意見をいただいた。後日、保育士からのアドバイスを参考に、実際に運営するにあたっての改善点について学生間で話し合いを行った。それを基に、用意したいくつかの企画の中から、最終的に1つの案に決定し準備をすすめた。学校での作業においては、グループで分担し、ゲームのルール作り、制作物の用意などを行った。実施前にはリハーサルを行い、各自の役割分担などを確認するとともに、スムーズに展開できるよう話し合い、工夫改善を行った。

また、実施後には、学生及び保育園のクラス担任に対し、“子どもたちの様子・子どもたちは楽しく参加できたか”・“ゲームコーナー企画運営についての改善点”・“園行事参加により、自身の学びになったもの(学生のみ)”について聞き取りを行い、担任保育士からの意見は、振り返り学習の授業内で学生にフィードバックされた。

なお、対象者への倫理的配慮として、本実践報告の目的及び結果を学会等で発表することを口頭で説明し、写真掲載にあたっては学生や保育園園長及び、参加園児の保護者から了承を得た。さらに、担任保育士からの感想や学生から提出されたレポートについては、個人が特定されない形で取り扱う事を説明した。

2) 実践授業の概要

- ・実施日：2018年1月24日
- ・実施時間：9：45～11:00
- ・実施場所：K保育園ホール
- ・参加行事：お店屋さんごっこ
- ・実践内容：ゲームコーナー担当

行事当日は、開始30分前からホールで準備を行った。その後、ゲームコーナー担当とお店屋さんのお客役に分かれて行事に参加した。(図1～図5)



図1 子どもたちと一緒に活動の注意事項を聞く様子



図2 的当てゲームで子どもの援助をする様子



図3 景品引き渡しで子どもとやり取りする様子

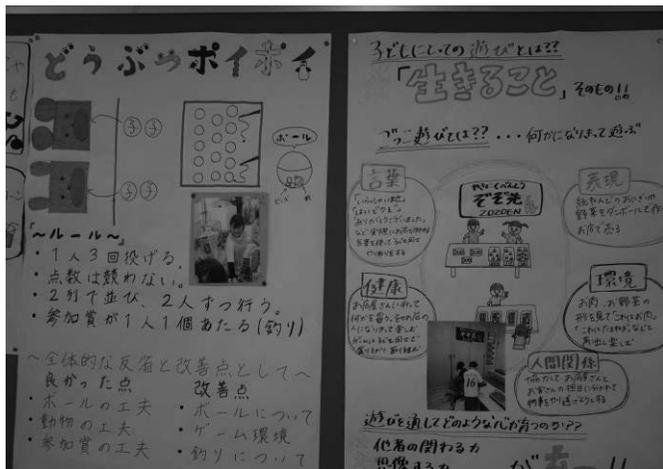


図4 振り返り発表用プレゼンテーション資料



図5 振り返り発表の様子

3. 結果と考察

本事例では、学生それぞれが活動を振り返りコメントを書き、それを共有した。感想の主なものとして『子どもの発達理解に関するもの』『自分達で企画計画し成し遂げる、協働する楽しさ・他者の意見を認め、お互いを尊重し協調していくことの大切さ』に関するものがあった。実際の学生のコメントを見ると、「お客さんが来ない時、小さい子は飽きていたが、大きい子は一生懸命大きな声を出して呼び込みしており、違いが見られた」・「大きい子の真似をして小さい子も声を出し呼び込みしていた」など、年齢による違い、異年齢同士の学びあいについての気づきがあった。また、「子

ども達はお店屋さんになりきって一生懸命自分の役割を果たしていた」・「役割分担したり、順番を守ったり、子ども達の色々な姿を見ることができた」など、幼児が遊びを通して様々なことを学んでいる様子が観察されていた。また、「短い時間で協力し合って実践することができ良かった」・「実践後のグループワークでは、自分では気づかない部分もあったので、他者と話し合い実践を振り返ることができ良かった」・「他者の意見を聞くことで自分の反省点もわかった」など、保育において協働することの大切さについてあげられた。このように、学生たちは実際の園行事に参加することで、保育の中で子どもが他者との関わりを通して育つ様子を実際に見ることができ、子ども理解を深めるうえで貴重な経験をすることができた。さらに、実際の園行事に参加することにより、実施に至るまでの過程で、学生自身が企画立案・運営することで、グループ内での話し合いや作業を通して、協働し学びあい互いに高め合うことの大切さや、期日までに準備をすすめていくという計画性について学び、責任感を持って行動しようとする様子も見ることができた。

以上のように、本実践は、子どもの観察はもちろん、主体的に責任を持って行動することの大切さや他者とのコミュニケーションについて学ぶ機会とすることができた。さらに、企画立案における学生間のやり取りを通して、他者と協働することとなり、日頃の学校生活だけでは得られない経験をすることができたようだ。この体験は、実際に保育現場で求められる、計画性や他者とのコミュニケーション能力にもつながるものと言えるだろう。今回の実践授業は、卒業年次の1月という、すべての現場実習が終了した時期に実施した。その時期だからこそ、学生たちは、気づきにつながる経験ができたのかもしれない。しかし、もう少し早い時期、入学後の現場実習前に実践することで、実際の現場実習において、より充実した学びにつながる可能性もある。また、2年生の実践発表を1年生が聞くなど、学生同士学びあう機会を設定することで、更なる学習意欲の向上につながることもあるだろう。以上の点を踏まえ、今後は、授業の実施時期や事後指導の在り方など、より効果的な取り組みを検討する必要があると考えられる。

4. まとめ

2018年の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂により、小学校就学前の子どもたちの姿を想定した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」が示された。それらは、知識・技能、人間性に加えて、思考力・判断力・表現力などの「学びに向かう力」を柱として構成されており、いかにして子どもにこのような力を育てていくのか、保育の質の向上が課題となっている。10の姿は、保育所保育指針解説書では、「乳幼児期にふさわしい生活や遊びを積み重ねることにより、保育所保育において育みたい資質・能力が育まれている子どもの具体的な姿であり、特に卒園を迎える年度の後半に見られるようになる姿である。」²⁾・「卒園を迎える年度の子どもの突然見られるようになるものではないため、卒園を迎える年度の子どものだけでなく、その前の時期から、子どもが発達していく方向を意識して、それぞれの時期にふさわしい指

導を積み重ねていくことに留意する必要がある。」²⁾・『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は保育所の保育士等が適切に関わることで、特に保育所の生活の中で見られるようになる子どもの姿であることに留意が必要である。」²⁾と説明されており、保育者の関わりが子どもの発達にとって重要であることがわかる。秋田(2013)は、保育の質を実践の場において考える場合には、園において実際にどのようにやりとりをおこなっているか、そのやりとりを支える保育者の専門性としての園での実践的知識や行動方略を同定し解明していくことが、保育者の養成や現職教育のあり方を考えていくためにも必要であるとしている。

今回は、「お店屋さんごっこ」という実際の保育園行事に参加しての実践授業を行った。遊びは乳幼児期の生活や学習の中心であり発達とも深く関わる活動である。子どもは日々遊びを通して学んでおり、その遊びを通して子どもの発達を促すのは、幼児教育・保育の大きな役割である。本事例では、学生が子どもの遊びの中に入り、実際に子どもと触れ合うことで子どもの発達理解を深める機会となった。また、それだけでなく、学生自身の人と関わる力の育ちについても見ることができた。この結果を、今後の授業展開に反映するとともに、保育現場との連携授業を行うにあたっては、養成校、保育現場双方にとって、互いが学びあい、保育の質向上に結び付けられるような、連携・協働のあり方を工夫、検討していきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、保育園園長先生はじめ、行事担当保育士ほか保育園の担任の先生方、保育園園児の皆さんには多くのご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省. (2018). *幼稚園教育要領*
- 2) 厚生労働省. (2018). *保育所保育指針解説*

参考文献

- 内閣府. (2018). *幼保連携型認定こども園教育・保育要領*
- 秋田喜代美. (2013). 葛藤場面からみる保育者の専門性の探究(吉久知延). *野間教育研究所紀要*, **52**, 1, 10-20.
- 渋谷泰香・齋藤正典. (2016). 相模女子大学幼稚部における「お店屋さんごっこ」の実践を通して—幼稚部の教育プログラムの見直しの現状と今後の展開—. *子ども教育学会紀要* **8**,5-14.

- 岩立京子（編）．（2018）．*新訂 事例で学ぶ保育内容：領域人間関係*．：萌文書林．
- 杉村伸一郎・山名裕子（編）．（2019）．*保育の心理学*．：中央法規．

